

# 西本願寺本三十六人集中の 躬恒集の筆者について

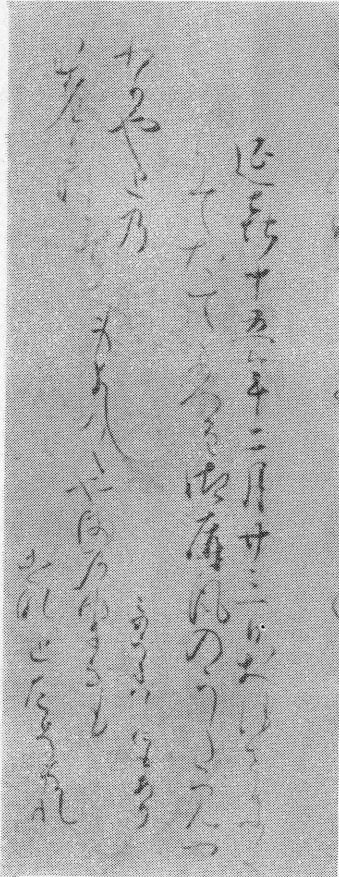
佐藤正憲

西本願寺本三十六人集中の躬恒集の筆者について承香殿女御といわれた藤原道子とする説があるが確説ではない。それはともかく、私はこの帖にはA B二人の手が見られることを指摘したい。大部分はAが書いているのだが、詞書の一部や左注に明らかに別の手と見られるところがあるからである。この書手をBと呼ぶことにする。だれが見ても異論のなさそうな部分が十六箇所（五十三行）あり、まずBと見て間違いないと思われる部分が六箇所（六行）あって、合計二十二箇所（五十九行）に及んでいる。

本帖の書写はAが分担したものであるが、当初不明の箇所があったため、後に書込むことができるようあらかじめ空白を残しておいたものと見られる。その空白を埋めて書込みを行ったのはAとは別人のBであった。こう見るべきであろう。

AとBとをその筆蹟について比較すると、Aは字粒は小さく、運筆はかなり速く、したがって筆勢は強く鋭い。これに対してBは字粒が大きく、ゆっくり書いているようで、筆勢がおだやかである。連続のしかたについて見るとAは巧妙をきわめているがBは素朴平凡で見るべきものはない。かくしてAとBとは明らかに別手であるが、時代の先後はにわか

に断定できない。むしろ同時代と見るのが適



歌と注はA、詞書はB

<p>A わかやとの むめにならひてみよしのゝやまのゆきをも はなとこそみれ</p>	<p>B 延喜十五年二月廿三日おほせによ りてたてまつる御屏風のうたみつ</p>
--	--

注  
このうたはしにもあり

当であらうと思う。したがって、Bの書込みはあまり時を隔てることなく行われたものと考えられる。

次にBの書込み二十二箇所を順次傍線を付して列挙し、その注目すべき点を述べてみよう。番号に○を付したものは異論なかるべき箇所、その他はまずBと見てよからうと思われる箇所である。( )の中の数字は書込みの行数を示す。

1 延喜三年十月十九日 (1) 2 延喜五年二月十日 (1) 3 朱雀院をみなへしあはせのうた…………… (1) 4 清涼殿のみなみのつまにみかはみつなかれてたりその前裁に…………… (7) 5 亭子のみかとおほめに…………… (1)

(1) ⑥延喜御時屏風の歌三首内 (1)  
⑦延喜六年六月廿一日壬生忠峯…………… (4)  
⑧延喜十三年十月十五日…………… (3) ⑨延喜十五年二月廿三日…………… (2) ⑩写真参照

⑪延喜十五年三月廿三日…………… (3) ⑫已上延喜十七年仰によりて…………… (3) ⑬此十首は延喜十六年四月廿二日…………… (6) ⑭同十六年九月廿二日近江介の消息…………… (9) ⑮その屏風障子等哥所々のたいにしたまふ…………… (1)

⑯延喜十八年八月十三日右大臣家八講…………… (3) ⑰同年つこもりの夜…………… (1) ⑱

乳御母の命婦 (1) ⑲同廿年二月廿七日遠江守の…………… (2) ⑳延喜四年かみなりのつほにて (1) ㉑延喜七年五月晦夜 (1)

㉒同十六年秋述懐 (1) ㉓法皇六条の御息所かすかに…………… (6)

1 この行は後からの書込みで、だからこの行の下に余白ができていのだと思う。

2 も1と同様に考えられる。

3 「朱雀院」の三字は下の「をみなへしあはせ」への続くぐあい自然でない。

4 「清涼殿」「の」の位置が普通でない。

この詞書と歌との間が空きすぎている。文中の「みなみの……………なかれてたり」の部分だけが先に書かれた。

5 「亭子」の位置が注目される。

⑥は字粒の大きさがちがう。「能」の草仮名にの特徴が見られる。なお、Aはこの草仮名をほとんど使わない。

⑦前半四行がBの書込みであるが、終りの「かひのつかひ」の五文字は、既にAが書いているので、Bが書く必要はなかったのである。左傍の点は見せ消ちと思われる。この箇所はAとBとの関係がよくわかるので注目される。

⑧⑨⑩⑪いずれも字粒が大きく、きゅうく

つな書込みになっている。

⑫左注である。このページはAとBとを対比してみるのに都合がよい。⑬も同様である。

⑭字が大きく、下がつまった。

⑮B独特の「留」の草仮名が使われている。Aにはこの仮名は見られない。

17あるいは「行幸 ありしとき」にも加えてBの手と見るべきかもしれない。原本を見た上で言いたい。

⑯詞書はこれで終ったのではあるまい。⑰書込みはこのページだけで終り、次のページの空白は必要でなくなった。

以上はコロタイプの複製本を見て気づいた所である。ほかにもBの書込みと見るべき箇所があるかもしれない。あるような気もするが、それは原本をよく見なければ言えない。

ここに述べたことを複製本を示しながら何人かの友に披露したのはもう十数年も前からのことである。反論するものは一人もなかったが、世に出ている解説で、このことに言及しているものは今もないようである。筆者について説のある帖だけに注目すべきことと思う。

(五八・一・一七)